



海を守り、自ら学ぶ きれいのその先へ 岬高校ピリカ部



※ピリカとはアイヌ語で「美しい」「きれいだ」という意味

今回は、高校生が主体となって清掃活動を行う大阪府立岬高等学校「ピリカ部」の、海洋ごみをめざして取り組む姿をお届けします。

ときめきビーチを守る 高校生たち

毎週土曜日にときめきビーチ（淡輪海水浴場）を中心に清掃活動を行うピリカ部。浜辺の清掃に加え、SUPで海に出て、海上にある漂流ごみの回収も行っています。毎週活動を行っているにも関わらず、毎回平均ゴミ袋6袋分のごみを回収しています。

季節によって落ちているごみの種類は変わります。例えば夏なら花火やバーベキュー、海水浴客のペットボトル、缶ビンなどがあります。冬は街から風で飛んでくる発泡スチロールや海外から流れてくるごみが多く見られます。

SUP(サップ)
スタンドアップパドルボードの略称で、ボードの上に立ちパドルを漕いで水面を進んでいくウォーターアクティビティです。

変わっていくのは 風景だけじゃない

岬高校は今年の8月に「高校生ごみ拾い日本一」を決める「スポGOMI甲子園」という大会に参加しました。

「一位をめざすというより、少しでも多くのごみを拾えるように」という思いで臨んだところ、大阪府大会で優勝し、うれしい結果となりました。

また、2025大阪・関西万博のパビリオン「BLUE OCEAN DOME」で、SUPを使った海の美化活動としてステージ発表も行いました。

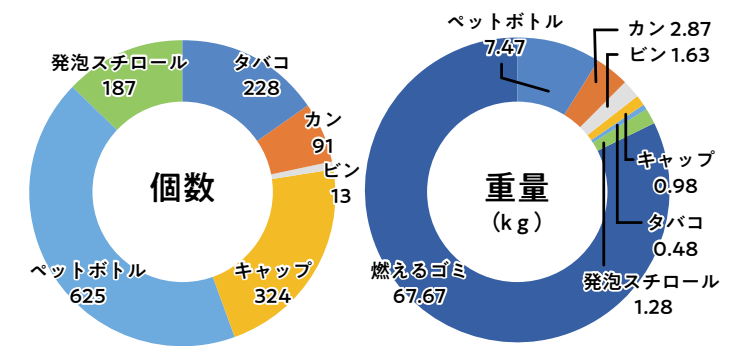


左からピリカ部 池村 七海さん、伊窪 良先生、鈴木 龍 青さん、河野 翔 太郎先生、田代 海夏斗さん



スポGOMI甲子園優勝！圧巻のごみの量です！！

2025 年 4 月～ 9 月の海洋ゴミ回収状況



活動のきっかけは 生徒のひと言

この活動は6年前に、体育の授業でSUP体験をした生徒の「普段使わせてもらっているこの海をきれいにしたい」という声からはじまりました。さらに他の生徒たちからもこのような声が集まり、教員の「自然にふれあいながら体を動かすことで、座学では得られない体験から自信をもってほしい」との願いから創部に至りました。

生徒たちの「海をきれいにしたい」と

ピリカ部顧問の伊窪 良先生は「入学当初は人前で話すのがにがてだった生徒が、発表の場で堂々と自分の言葉で伝えられるようになったり、先輩が後輩をサポートする姿が見られたり」と、対人関係や主体性の面で成長があった」と生徒たちの大きな変化を感じています。

また3年生の鈴木龍青さんは「活動中だけでなく普段の生活でもごみについて意識するようになり、分別をしつかりするようになったり、これまで気がつかなかったごみを拾ったりすることが増えた」と自身の気づきを話します。

今よりこの地域を きれいにするために

「定期的に清掃活動を行っていても、毎回たくさんのごみを回収している。ごみを減らすために、拾う人を増やすのも大切だが、ごみをポイ捨てる人が減ってほしい。そのために、このような活動をしている高校生がいることを皆さんに知ってほしい」と3年生の田代海夏斗さん。

また顧問の河野翔太郎先生は「地域の団体だけでなく、一般の方ともつながって協力していきたい」と話します。これからもInstagramでの広報を通して、より多くの方に活動を

いう思いは後輩へと引き継がれ、活動の幅も広がり、校内の環境美化や地域活動への参加にもつながっています。今年6月にはライオンズ万博in泉州で、生徒がSUP体験の講師を務めました。100人以上の参加者へSUPを通してピリカ部の活動を伝えると、体験中に一緒にごみ拾いをしてくれる参加者もいました。生徒たちの思いが、校内や地域を巻き込む活動になっています。

地域の皆さんからも 感謝される活動へ

「地域の皆さんが普段の活動を見守ってくれている。海をきれいにしてくれてありがとうと感謝されると幸せな気持ちになる」と、3年生の池村七海さんは話します。ピリカ部は今年度の大阪府民生委員児童委員大会で「子どもさわやか賞」を受賞しました。生徒にとっては、普段から当たり前のように行っていることですが、地域の皆さんの応援と共感を得る活動になっています。

また、すすんでごみを拾う姿勢が、地域の人から「ありがとう」と声をかけられる経験になり、生徒たちの自信や責任感をさらに後押しし、成長につながっています。



万博での発表のようす

知ってもらえるように、そしてさまざまな団体と協力しながらごみをめざして活動を続けます。

ピリカ部
Instagramはこちら

